

カンガルーシップ活動 共生プロジェクト 実施報告書

報告日	平成27年3月18日(水)
主管学校名	筑波大学附属大塚特別支援学校
P T A会長名	吉川 幸代

実施概要	主管校	筑波大学附属大塚特別支援学校 小学部
	交流校	筑波大学附属小学校 筑波大学附属駒場高等学校
	実施活動名	芋堀交流会 バザー交流会 理科交流会 体育交流会(お別れ会)
	実施日時	芋堀交流会 : 平成26年 7月3日(木) 10月24日(金) バザー交流会 : 平成26年 10月19日(日) 理科交流会 : 平成26年 12月17日(木) 体育交流会 : 平成27年 3月4日(水)
	実施場所	バザー交流会 : 筑波大学附属大塚特別支援学校 小学部教室 プレイルーム 体育館 芋堀交流会 : 筑波大学附属保谷田園教場 理科交流会 : 筑波大学附属大塚特別支援学校 体育館 体育交流会 : 筑波大学附属大塚特別支援学校 体育館
	実施目的	<ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学附属小学校児童や保護者と活動を共にすることにより、児童の経験を広め、外界への積極的な態度やマナーを養い、社会性や豊かな人間性を育む。(児童) ・障害者が健常者(小学生、高校生、大学生、保護者、教員)と活動を共にすることで、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さや、多様な活動を体験することで感動を共有し生きる力を培う。(交流者同士) ・活動実践と成果を対外的にアピールすることにより、インクルーシブな教育の理念の重要性とその理解と啓発をはかり、推進への使命を果たす。(関係する教員) ・大人社会が「共生」教育における理念を語る時代から、具体的な方法論検討の時代へと前進していくために、実践研究の附属校としてのリーダーシップをとり、インクルーシブ教育の具体像を描き創造していく。(学校組織)
	実施内容	<p>芋堀交流および共同学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農場にて児童と一緒に芋堀後に昼食を共にし、集会活動(ゲームやダンス)を行う。 ・昼食を準備する附属小学校の保護者や教員とふれあう。 <p>バザー交流会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校PTA主催のバザーに、附属駒場高校の生徒や教員を招待し、児童と一緒に買い物をしたり、ゲームを楽しんだりして過ごす。 <p>理科交流および共同学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の設定授業等で取り組んでいる歌やダンスに交流校の生徒や教員が参加し、活動の場を共有する。 ・交流校の生徒から、自然現象や事象に関する理科学的な内容を披露してもらい、感想を伝え合う。 <p>体育交流およびお別れ会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の設定授業である合同体育の「デカパンリレー」を一緒に行い、プレゼント交換や手紙のやりとり等して、お別れする気持ちを伝えあう。
	実施方法	<p>事前</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担当者と事前打ち合わせをした後、計画立案する。 ・部だよりや学級便りで、交流内容を保護者へ案内する。交流に関する保護者アンケートを配布して、保護者への理解を求め、子どもたちが積極的に交流できるよう促す。 ・事前学習として、昨年度の交流をDVDで鑑賞する。案内状やビデオレターを作成し交流校へ郵送する。 <p>当日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・芋堀交流では、本校児童は、スクールバスにて保谷の現地へ移動する。附属小学校の保護者は、活動の様子をビデオ等で記録する。附属小学校の保護者が掘った芋をその場で調理し(カレー、豚汁)、全員で食べる。各自芋を家庭へ持ち帰る。 ・本校で実施するその他の交流では、交流校の児童(附属小)をスクールバスで送迎する。 <p>事後</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校児童は交流の感想を日記等を書く。 ・交流校へ感想文を依頼する。 ・保護者からのアンケートを集約する。保護者会で活動の様子を説明し、DVDにて家庭へ報告する。交流校へ保護者や児童や教員の感想を伝える。

		<ul style="list-style-type: none"> ・校内にて写真等パネル掲示し参観者へ案内する。活動のDVDを筑波大学生への講義で紹介し感想を集約し、それを保護者や交流校へフィードバックする。 ・年度末に交流の思い出記録集(写真・文集・保護者の感想)を作成し、交流校へ配布する。 																								
	参加人数	<p>芋掘交流会</p> <table border="0"> <tr> <td>筑波大学附属大塚特別支援学校</td> <td>児童 24名、教員 10名、協力員学生 2名、教育実習生 1名</td> </tr> <tr> <td>筑波大学附属小学校</td> <td>児童 40名、教員 1名、保護者 12名</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">合計 90名</td> </tr> </table> <p>バザー交流会</p> <table border="0"> <tr> <td>筑波大学附属大塚特別支援学校</td> <td>児童 24名、教員 10名、学生 7名、PTA 保護者 24名</td> </tr> <tr> <td>筑波大学附属駒場高校</td> <td>生徒 3名、教員 1名</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">合計 69名</td> </tr> </table> <p>理科交流会</p> <table border="0"> <tr> <td>筑波大学附属大塚特別支援学校</td> <td>児童 24名、教員 10名、学生 6名、参観者 3名</td> </tr> <tr> <td>筑波大学附属駒場高校</td> <td>生徒 27名、教員 4名</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">合計 74名</td> </tr> </table> <p>体育交流会</p> <table border="0"> <tr> <td>筑波大学附属大塚特別支援学校</td> <td>児童 24名、教員 10名、保護者参観 18名、参観者 2名</td> </tr> <tr> <td>筑波大学附属小学校</td> <td>児童 40名、教員 1名、</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: right;">合計 95名</td> </tr> </table>	筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、協力員学生 2名、教育実習生 1名	筑波大学附属小学校	児童 40名、教員 1名、保護者 12名	合計 90名		筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、学生 7名、PTA 保護者 24名	筑波大学附属駒場高校	生徒 3名、教員 1名	合計 69名		筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、学生 6名、参観者 3名	筑波大学附属駒場高校	生徒 27名、教員 4名	合計 74名		筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、保護者参観 18名、参観者 2名	筑波大学附属小学校	児童 40名、教員 1名、	合計 95名	
筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、協力員学生 2名、教育実習生 1名																									
筑波大学附属小学校	児童 40名、教員 1名、保護者 12名																									
合計 90名																										
筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、学生 7名、PTA 保護者 24名																									
筑波大学附属駒場高校	生徒 3名、教員 1名																									
合計 69名																										
筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、学生 6名、参観者 3名																									
筑波大学附属駒場高校	生徒 27名、教員 4名																									
合計 74名																										
筑波大学附属大塚特別支援学校	児童 24名、教員 10名、保護者参観 18名、参観者 2名																									
筑波大学附属小学校	児童 40名、教員 1名、																									
合計 95名																										
報告事項	内容	<p>4つの交流会の中で、初めて実施した授業である「理科交流会」と「体育交流会」について報告する。</p> <p>交流会の概要① 筑波大学附属駒場高校2年生との「理科交流会」</p> <p>交流校として、初めての相手校である。事前に担当者間で、どのような交流学习が可能であるか、学習内容を持ち寄り児童にとって無理なく楽しめる題材として、理科実験を扱うことになった。</p> <p>事前にバザー交流会で、筑波大学附属駒場高校(以下、「筑駒」)の数名の生徒が、筑波大学附属大塚特別支援学校(以下、「大塚」)の児童と買い物学習等の交流を行った。今回の交流学习へつなげていくのに、筑駒の生徒にとって本校の雰囲気を知る機会となった。生徒たちに実験等のパフォーマンスを披露してもらい、という内容ではなく、「理科」的な内容で、児童と「いっしょに」「うごく」ことを大切にしていきたいと筑駒へ伝えた。そして、全く新しい学習を交流のために創るのではなく、児童生徒の経験や活動を持ち寄り、すり合わせながら学習内容を検討した。</p> <p><授業の流れ></p> <ol style="list-style-type: none"> ① はじめの挨拶 ② ウォーミングアップ 全員で、大塚の児童の好きな曲「世界の王」のダンスを踊る。 「ともだちになるために」の歌で筑駒の生徒と大塚の児童はペアをつくる。 ③ 大塚の教員による諸注意 必ず、筑駒のお兄さんと一緒に活動すること、道具の使い方や実験材料の置き場所に注意することを促す。 ④ 筑駒の生徒による実験の説明 ⑤ 実験開始 最後の歌で手をつないだ児童生徒がペアになる。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;">    </div> <p>「スライムづくり」「くるくるバルーン」「空気砲」の3つのコーナーを回る。</p>																								

⑥ まとめ

筑駒の生徒と大塚の児童の感想を聞く。プレゼントの交換をする。

⑦ 筑駒の生徒を見送り

大塚の児童は、アーチを作って体育館から筑駒の生徒を見送る。



<スライム作りコーナー> 絵の具を選んで、飽和ホウ砂水と混ぜて作ります。



<くるくるバルーンコーナー> 風船をふくらませてつなぎ、吹き上げます。



<空気砲コーナー> 箱に穴を開け、箱を叩いて空気を追い出しフィルムケースを倒します。

交流会の概要② 筑波大学附属一部6年生との「体育交流会」および「お別れ会」

年に2回芋掘り交流をしている筑波大学附属小学校（以下、附属小）の6年生とは、今年度で、3年目の交流である。同じクラスと3年間のかかわりの中で、互いの成長の姿を見続けることができた。附属小学校との交流では、大塚の児童一人に対して、数人の附属の児童を固定してチームを組んでいる。毎回一緒に活動する相手が決まっているので、児童同士の絆の深まりが感じられる。これまで、芋掘りのみならず「集まり」や「音楽」など、本校の普通の授業の中での交流を設定してきたが、今回は、初めて「体育」での交流を試みた。小学部が取り組んできた社会性を育む「体育」のデカパンリレーを題材とし、併せて互いの6年生が卒業するため「お別れ会」という主旨でセレモニーを設定した。

<授業の流れ>

体育交流

- ① 初めの挨拶
- ② 準備体操
- ③ デカパン競争
- ④ MVP 発表
- ⑤ 整理体操
- ⑥ 挨拶

お別れ会

- ① 挨拶
- ② 大塚から「おめでとうの歌」「ありがとうさようなら」
- ③ 附属小から 手紙のプレゼント
- ④ 大塚 副校長先生の話
- ⑤ 歌「友だちになるために」
- ⑥ 挨拶

大塚の子どもたちから、手作りデコデコマグネット
保護者からは、大塚のタオル製品のプレゼント



3月4日（水）、筑波大学附属小学校一部6年生がスクールバスで来校した。今回は、附属と大塚の保護者へ参観の声をかけたところ、大塚の保護者のうち、十数名が参観した。（父親一名へ写真係をお願いした）まず、初めは、大塚小学部オリジナルの体操である「おさるの体操」を全員で踊る。大塚の子どもたちの踊る姿をモデルにして附属小の児童は照れながらも元気に踊っていた。その後、附属小のいつもペアの友達と一緒に「デカパン競走」を行った。「デカパン競争」は、大塚の合同体育の授業で取り組んできた、社会性を育む体育の活動である。一回戦は、附属小のペアの友達とデカパンをはいてリレーを行った。子どもたちは、息を合わせてパーを飛び越え、手を最後まで繋いでゴールした。二回戦は、附属小 VS 大塚であった。6年生の附属小の児童のスピードは速く、少しの差で大塚は負けたが、互いに健闘を讃えることができた。最後に、お別れのセレモニーで歌を歌い、附属小の児童は大塚のペアへ手紙を渡した。互いに名前を呼び合い、いつのまにか、肩を組み座るペアや、膝の上に低学年の児童を乗せている附属小の児童の姿が見られた。



結果

今年度の交流学习の視点は、1. 多様で多彩な交流 2. 互いの違いの理解と啓発であった。

1については、①交流校の拡大②多様な内容の交流③互いの授業や活動を土台にした交流、2では、①生活年齢の違いによる交流の可能性②保護者の参加による理解③主体的な交流学习づくりを意識して取り組んだといえよう。

具体的に今年度は、筑波大学附属駒場高校との「理科」交流がスタートした。筑駒では、毎年科学部の生徒たちが、理科実験を特別支援学級へ向けに行っていると聞いている。今回の小学部との交流は、そのノウハウをいかして内容が検討された。東京学芸大学附属竹早小学校1年生とは、本報告には含まれないが、従来の「音楽」「集まり」のみならず、「給食」交流を試みた。一緒に楽しく食べる、ということを中心に、学部で大切にしている食育の中の手伝いやマナーを通常学校の児童たちへ伝えることができるだろうか、という点は重要だった。筑波大学附属小学校とは、同じクラスの児童と3年間に渡る交流だった。この間、校外学習の「芋掘り」だけでなく、「散策」「音楽」「集まり」「観劇」そして、今回の「体育」など、多様で多彩な交流活動を実施した。普段の学習に基づき、互いの学習活動や生活習慣の中に入っていく、それぞれの違いを知り合う機会を多く設けることができた。今回、たとえ生活年齢に違いがあったとしても、それぞれに興味関心のもてる要素と安心できる環境(人的・物的)と周囲の関わりや支援によって、楽しい交流が可能になることを子どもたちが証明してくれた。

筑駒生と大塚の児童の交流で「ダンス」「歌」「実験」という学習の要素の中で、「ダンス」と「歌」は、大塚独自の活動であるため、筑駒生は、児童をよく見て模倣をしていた。「実験」は、大塚の児童にとっては、初めてなので全面的に教えてもらうことになる。けれども、筑駒生の関わり方は、「教える」というよりも「寄り添う」「一緒に感じる」「発見や驚きを共有する」というスタンスであった。特

に申し合わせたわけではなかったが、みんなそのような姿勢であったため、大塚の児童は、お兄さんに親しみを感じ、とてもリラックスしていた。今年度、社会性を育むための活動として、学部の合同体育では、「ルールを守ってペアで協力するからこそ、上手に走ることができ楽しむこともできる」授業を創ってきた。附属小学校との「体育」では、大塚の普段の体育の学習にそのまま附属小の6年生が参加した。大きなパンツに二人で入って、ハードルをまたいだりくぐったりして競う活動である。この活動は、附属小の児童にとって馴染みがあるようだった。「おさるの体操」は、通常学校の6年生が踊るには、やや抵抗感があったかもしれないが、附属小6年生は至って真面目にこやかに、のびのびと体操をしていた。それは、「交流学习」という義務感や使命感からではなく、踊りそのものをおもしろいと感じ、踊る先にどんな動作があるのかを期待していたからだろう。またそれ以上に（芋掘りでの「おいもの体操」同様に）、顔なじみの大塚の友だちが、自分たちの目の前で、ぎこちなくはあるけれど一生懸命踊りを示しているからこそ、「自分たちも同じようにしっかりとしくは・・・」という気持ちが個々に働いていたのだと推察する。「デカパンリレー」も対抗戦になった際、大塚に対して「特別支援の学校だから」という感覚はなかったように見えた。みんな、大塚に勝ちたくて必死に走っていた。僅差で大塚に勝った時の附属小の児童たちの喜んでる姿に、障害があるとかないとか、学年が上だとか下だとか、背が大きいとか小さいとか、話しができるとかできないとか、そういうことは関係ない様子で喜び合っていた。実際の交流以外の関わりとして、子どもたちが学校付近で会った時に、声を掛け合っていることが報告されている。地域の学校である竹早小と附属小は、名刺交換などを通して互いの児童の名前や顔を覚えている子どもたちが多い。また、子どもたちが顔見知りであることをきっかけに、母親同士、互いの子どもたちの近況を語り合う手紙のやりとりが始まったケースもある。

以上、今年度の10回の交流学习から、2~3の場面を挙げてみた。昨年度より交流の回数は少ないが、年数を重ねたり、活発に身体を動かす活動だったり、静かに校内で実験などの共同学習等、交流校と多様な場面を共有したことで、互いを多面的に見つめることができた。交流校の児童生徒は、大塚の子どもたちの特徴をつかみ、それを受け入れて一緒に楽しむことを学んでいる。また、あるときは、尊敬のまなざしで本校の生活の姿を観察し、同じようにしたいと思っている。大塚の子どもたちは、校外の人々とふれ合うことで、外界へ積極的に向かえ、堂々と自分自身を発揮している。今年度は、初めて竹早小の保護者が本校で、「合同音楽」の交流授業に参加した。今後は、学習活動において附属小の保護者ともこのような機会をもち感想をうかがい、保護者同士も交流の意義を一緒に考えていくことが、「共生」の発展につながっていくと思われる。そのために、障がいのあるなしにかかわらず、どの子も楽しみ主体的に参加できる学習内容を用意することや、どんな人とも交流できる活動等への創意工夫やさらなるチームティーチングの質の向上が必要である。実践研究の附属校として、インクルーシブ教育システム構築のための具体像をさらに創造していくことが求められている。

所感

昨今、インクルーシブ教育システム構築へ向けて、学校や教育機関では、「共生」のための活動が多々試行されている。今年度、本校でも、多様な交流活動が実践された。

小学部において、交流は基本的に学部単位の集団で行い、「新たに『特別』な授業を設定するのではなく、特別支援学校の授業や日常生活の活動をベースにする」という点を大事にしてきた。また、前述したように「異年齢集団とのかかわり」「多様で多彩な教育内容と場」「地域社会との連携」をキーワードに、複数の教師が窓口となりチーム力を高め合いながら、交流学习を展開してきた。報告した交流校との取り組みでは、異なった経験と知識をもち、異年齢で多様な人々が同じ目的や関心でつながっている。そこには「違い」があるからこそ生まれる新たな価値や意味が見いだされたといえる。「交流を重ねていくことで心の壁を越えられ、何か新しい発見ができると思う」と筑駒の生徒が感想を述べている。年々、附属学校は多忙さを増すばかりであるが、教師が知恵を出し合い、何よりも「交流」「共同学習」を推進・継続していくことこそが、インクルーシブ社会の実現へつながっていくことになろう。今後も保護者の思いや願いに寄り添う視点を忘れずに、限られた選択に強いられることなく、また形式的、義務的で情性的な交流ではなく、主体的で豊かな連携を築ける交流活動でありたい。そして、子どもたち側が心から交流を願い、大人側は、共生の意味を問うていけるような交流をめざしたいと思う。諸学校において、交流および共同学習が『特別』なメニューではなく、当たり前な教育活動へ位置づけられることを求め、今後も教師一同学び合っていきたい。

最後になりましたが、全府連をはじめ、本実践にご協力いただいた全てのみなさまに感謝申し上げます。

カンガルーシップ活動 共生プロジェクト参加感想

提出日	平成27年3月18日(水)
学校名	筑波大学附属大塚特別支援学校
氏名	

<筑波大学附属駒場高校との交流について、大塚の児童のつぶやき>

- ・たのしかったねー。おにいさん、またきてね。やくそくだよ。
- ・こんどは ぼくたちの おんがくの じゅぎょうで いっしょに バイオリンや しゃみせんを ひきたいね。
- ・デカパンリレーを おにいさんたちと したいな。

<筑波大学附属駒場高校との交流について、筑駒の生徒の感想>

- ・大塚の児童は明るく元気で積極的。
- ・障害をもった人と普通の人たちの中で橋渡しをする存在や、今回のような機会が増えていくといい。
- ・世の中では、偏見もあると思うが、それを超えて共生していくことは大切である。交流を重ねていくことで、心の壁を越えられ、何か新しい発見ができると思う。

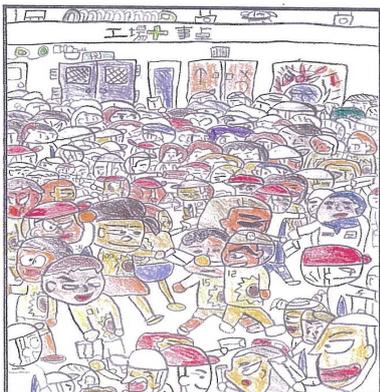
<筑波大学附属小学校との交流について、大塚の児童の感想>

今日は、友達と、デカパンリレーをしました。さーいこの交リゆうでいっしょに走れて楽しかったです。三年間、ありがとごございました。



交流会でいっしょにのびた絵を描こう！
3月4日(水) 曜日 なまえ
ひびし絵日記
四年

きょうつふでく小学校との交流会がありました。デカパンリレー、楽しかったです。ぼくは、白ぐみでしたが、負けたのです。くやしかったです。



交流会でいっしょにのびた絵を描こう！
3月4日(水) 曜日 なまえ
ひびし絵日記
三年

<筑波大学附属小学校との交流について、附属小の感想>

- ・3年間たのしかったよ。本当にありがとう。
- ・一回一回の交流会楽しかったよ。もう会うのも最後だけど楽しかったね。私たちが中学校に行っても忘れないでね。
- ・〇〇ちゃん、3年間楽しく交流できてとってもうれしかったよ。もう、お別れなんて…。とても悲しいです。〇〇ちゃんと一緒に過ごした時間は宝物です。じゃがいも、さつまいも、とってもおしかったよね。私たちが中学校に行っても忘れないでね。今まで、ありがとう、さようなら。
- ・4年生のときからずっと交流をしてきて、私はすごく楽しかったよ！〇〇くんは、楽しかった？あつという間だったネ。〇〇くんと一緒につくった思い出は忘れないよ。いもほりしてる時の〇〇くんは、ステキ！！3年間本当にありがとう！
- ・〇〇ちゃんは、いつも明るく元気がいいネ！〇〇ちゃんが笑っていると、私もわらっちゃう。私はもうすぐ卒業して、ちがう中学校に行ってしまうけど、ずっと、と・も・だ・ちダヨ！〇〇ちゃんももうすぐ6年生だネ。学校での最高学年ダネ！1年生から5年生までひっぱって行ってネ！もう会えないネ！けど、忘れないでネ。私は忘れないよ！
大大大好き。
- ・いつも、仲良くしてくれてありがとう！交流会の時とか、いつもいっしょにいてくれて楽しかったよ！そして、私の名前もおぼえてくれて呼んでくれてうれしかったよ！じゃがいも掘りとかさつまいも掘りは、いっしょに掘って、食べて、一日がサイコーの日だったよ！今回の大塚との交流会で私たちの交流も終わりになっちゃってさみしいな！〇〇ちゃんとの思い出忘れないよ！まだ、〇〇ちゃんの小学校生活はあるよね！？楽しんでね！私も中学校に行ってもがんばるよ！！
- ・3年間ありがとうございました。いつも交流会楽しかったよ！！〇〇ちゃん的笑顔をみると安心していました。何にでも一生懸命で友達に優しい〇〇ちゃんが大好きだよ。ダンスを踊っている時見れる笑顔、ずーっと私の心の中にあるよ！！これからも、優しく、いつも笑顔でいてね。今までありがとう。さようなら。



＜大塚の保護者から附属小学校へ＞



- ・3年間の交流ありがとうございました。先日もお手紙をいただきとても喜んでいました。附属小の保護者の皆様には美味しいカレーや豚汁、焼き芋等を毎回準備いただきありがたく思っております。感謝申し上げます。3年間継続して交流できたことは、お友達にも親しみがわきとても良かったと思います。障害を知ってもらうことが大切だと思っています。このような交流が増え、特別ではなく自然に受け入れてくれる人・場が増えていくことを願っています。
- ・いつもは8人クラスで生活している我が子にとって、元気なたくさんの方の附属小の生徒さんと同じ時を過ごすことは楽しみでもあり、ちょっぴり緊張もあり、でも普段の活動では決して得られない刺激をいただける貴重な時間だと思います。また、他校と交流することで改めて身内である自分の学校、仲間を意識するきっかけにもなっているようです。先日最後の交流会を見学させて頂きました。デカパンリレー、楽しかったですね。身体を動かすのは良いな、と改めて感じました。二戦目の学校対抗、無茶とわかっていても、附属は手を抜かず、大塚は諦めず、そして両校とも楽しそうでした。障害を持ちつつ普通級に通う友人は学年が上がるにつれ悲しい思いをしているのも現実です。守られた環境の中で穏やかな交流がなされることに感謝しつつ、少しでも障害についての理解が広がる社会になればと願います。
- ・3年間の交流、ありがとうございました。特に今年度は交流会数を増やしていただき、6年生という大切な時期にあるお子様たちの学びの時間を大塚との交流に当ててくださったこと、またそれを許してくださった保護者の皆様に感謝いたします。知的障害をもつ子どもの存在を知り、受け入れてくださる社会のありかたや、地域が存在が親、保護者の心の安定につながり、それが障害児者の安定また兄弟姉妹への大きな支えとなっております。3年間このような取り組みを支えてくださった全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。
- ・交流の様子の写真には、いつも同じ男の子2人が息子に笑顔で寄り添ってくれていました。息子は交流の報告をすることはできませんが、安心して活動に参加できたと思います。楽しい交流をありがとうございました。また、芋掘りの時の昼食のご用意もありがとうございました。
- ・芋掘りやデカパンリレーを通して仲良くしてもらいとても嬉しそうでした。「お手紙をもらってうれしいの」とも言っていました。附属小との交流は楽しいといつも言っています。いろいろな刺激をもらえたと思います。ありがとうございました。
- ・附属小との交流を通してたくさんの素敵な思い出を作ることができたと思います。お別れ交流会を参観させていただきましたが、子どもたちの自然なふれあいがとても心温まりました。このような交流がこれからの成長に必ず役に立つものと思っております。今後是非このような機会を作っていただけたら嬉しいです。ありがとうございました。
- ・思いもよらず涙がほろっと出てしまうほど感動いたしました。息子はうまくお話することができないので、良いことも悪いことも全く分かりません。交流会の様子は先生から発信される文字だけが頼りで、「ふ〜ん」という程度のことしか考えておりませんでした。実際に参観させていただき、子どもたちの無限の可能性に驚き、感激しました。とりわけ、Kさんとパートナーだった6年生のお嬢さんが印象的でした。背の高い足のスラーっとしたお嬢様でしたが、Kちゃんの視線に腰をかかめて誰かに指導されたというわけでもなく自然の配慮であったことに感動を覚えました。しかし、それはどのお子さんにも見られました。大塚の子が、6年生のパートナーに会えて嬉しくて嬉しくて、ハイになってものすごく喋っている子、抱きついている子、飛び跳ねている子、いろいろでしたが6年生のお兄さんお姉さんたちはそれを優しく受け止めていました。保護者でもない子どもという同じ立場であるのに…もしかしら、こんなことは障害児の親である立場の人が申し上げるのは大変おこがましく凶々しいかもしれませんが、障害時には人にやさしい気持ちを起こさせる何か神様からのGIFTがあるのかもしれない。これこそが、未来の日本が国の発展のためにもめざすべき inclusive 教育ではないかという考えがよぎりました。強いものと弱いものが互いに良い面を出し合って、本来人として備わっている、支えあって生きていくこと、そんな素晴らしいものを垣間見ることができて、とても幸せに思いました。感謝申し上げます。
- ・三年間を通し、お互いが貴重な体験ができたことは、大塚の保護者として心から嬉しく思います。最後の交流会で頂いたお手紙、何回も何回も封筒を開けては手紙を広げニコニコ顔で見返している息子を見ると、「楽しかったのね」と本当にわかりました。デコデコマグネットも一つ一つ丁寧に心を込めて制作していたと聞きました。喜んでもらえると張り切って作り取り組んでいたのでしょう。皆様のおかげで成長する姿が沢山ありました。良い交流をありがとうございました。“ご卒業おめでとうござい。感謝を込めて